島松だより

Vol.27

題字・絵／田川 正悦



日本キリスト教団
島松伝道所
〒061-1351
北海道恵庭市島松東町4丁目1-8
牧師／ 辻中徹也・辻中明子
電話・FAX／ 0123-36-7275
http://homepage2.nifty.com/simamatu/

それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

コリントの信徒への手紙 一　12. 22

つながる。つながり

牧師　辻中明子

証し

九月二十三日、久しぶりに実家のある岩手に帰った。北上教会を会場に、奥羽・東北教区内で自主活動をしている「みちのくコスモス会」の集会に出席するためである。「みちのくコスモス会」とは故島崎光正牧師と中心メンバーである小田嶋義幸さんたち有志が十五年前から障がいを負うキリスト者の会として活動されている会である。島松も「障がい者と共にある教会形成」を目指す教会として歩んでいるということで、島松の話をさせていただく機会となり、徹也牧師の“そううつ病”への戸惑いと受容から、島松が大切にしている「かえって弱さが必要なので す」を証しさせていただいた。各地からの参加者との出会いと新しいつながりが与えられ本当に嬉しかった。

希望が生まれる

参加者の中に会員が十人に満たない、いわゆる小規模教会の方がおられ、その苦労を語ってくださり心が打たれた。島松が属する苫小牧地区にも、十人に満たない教会は幌泉教会、洞爺湖教会の二教会。洞爺湖教会は牧師招聘を願いつつも実現していない。代務牧師の方と「小規模教会ネットワーク」をつくりたいね・・と語り合っている（アイディアをお持ちの方お知らせ下さい。）地区や教区の支援や連帯だけでなく、さらに全国の教会とのつながりから新たな希望が生まれるのではないか。孤立感、閉塞感に陥りやすい思いも含め、共通した課題を共同研究していけたら楽しいし、同じような苦労の中から希望が生まれる予感がする。

駆けつける

会堂建築（再生）物語と隣接地購入についてお伝えしてきている。しかし、現会堂の外壁はペンキがはがれ落ち、屋根のトタンは、大屋根以外は腐食し張り替えが急務な状態。敷地周辺の樹木の枝払いも必要。今できることはペンキ塗りと枝払い。島松のメンバーを考えたら、この夏半分だけでもやりたいとワークを計画した。神の御心が働いたのか、予想を超える大勢の方々が駆けつけてくださった。合い言葉は「ペンキ熱くぬるべ！」。力を頂いたこのワーク、島松の若者たち（&おじさんたち）にバトンが渡されこの夏四回の実施。お隣りに住む方々からも「二十年振りに明るくなった」と喜びの言葉。

これこそ奇跡

島松が全国に発信して二十四年目になる。この長い間にわたって、直接お会いすることもない全国の教会やその信徒の方々が祈りを込めた声援を送ってくださった。主がおこしてくださる奇跡ではないか。私たちは、そのひとつひとつの教会や、ひとりひとりの方にお礼を言いに出かけて行きたい気持ちでいる。置かれている場所や教会の課題、規模もそれぞれ異なりながら、つながって下さる思いに島松は何度助けられ、何度前向きに歩めたことか。地方の小規模教会が、今ある地区や教区の枠組みさえも超えてつながることを願い続ける一人である。この歩みは小規模教会だけでなく、大きな教会の歩みにも通じるのではないか。今、明るい見通しなど持てない社会。希望よりも絶望が、信頼よりも不信が、和解よりも決裂が身近にある。しかし、弱さを真ん中にした、主にあるつながりは奇跡をもたらす。



「わたしはぶどうの木、あながたは枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」
（ヨハネ十五：五）

特集　島松会堂建築物語－第３章－

集まった！働いた！語り合った！

～すべての人をつなぐ　ひだまりに向かって～



はじめに

ここ数年「キャンプ場」に出かけず、教会でワークキャンプをしている。今年は、都合四回ものワークをこなした。

そもそも市から舗装工事の支障となるニオイヒバの下枝払いが要請され、ならば、うっそうと茂った枝をすっきり間伐しよう！外から見えやすくなるから、剥げ落ちたペンキも塗ろう！となった。

七月末の第一回は地区内外から二十名もの応援を頂き、九月の第二回、三回は帰省した若者はじめ島松チルドレンが結集。共に働き、食事をし、語りあう豊かなひと時が与えられた。かくして、怪しげな趣さえあった外観は、心地よく手入れされた？佇まいに変身。十月には隣接地購入も決まり、長年の路上駐車も解消。

来年は端材を使ってウッドデッキを、いや手作り看板が先か？いずれうどん食堂や牧師館も、など妄想は広がっている。

真っ白いペンキ

朴　明敏

七月三十一日、夏のほんわかした心地よい日差しを感じながら浦河から七名の仲間で駆けつけました。

ペンキ塗り、童心に帰る思いで、ウキウキしながら始まりました。最初は古いペンキをはがす作業でした。何十年もの島松伝道所の歴史を刻んできたペンキをブラシでこすりながら、古いペンキを取っていきました。これが意外と難しく、こすってもこすってもなかなか取れず、最終的に残ってもしかたないかと互いに言い聞かせ合いながら作業していきました。

大体古いペンキを落とした後、真っ白なペンキを塗りました。こちらは思いのほかうまく塗ることができ、ある方から、「みんな、ペンキ屋やったらいいんじゃない？(笑)」と言って頂けるほどみな必死に塗りました。

そのような中、古いペンキをはがしながら、そして新しいペンキを塗りながらふと思ったことがありました。

「長年の歴史を刻んできたペンキははがしにくく、キレイにペンキをはがそうとしてもキレイにとれない…いくらブラシでこすってもキレイにとれない…もしかすると『罪』と同じなのかもしれない。私の罪もこすってキレイにしたいと思っても、なかなかすっきりせずに、あたかもこびりついているかのように残っている・・」

ペンキ塗りを通して、ふとそのようなことを思いました。

ペンキを塗り終えきれいになった島松伝道所にいろいろな思いを持ったひとりひとりの方が導かれ、神様と出会い、「こんな私だけど、許され生きていていいんだ」と思えるような、そんな教会が地域にあったら、どれだけの方が安心してこの世で暮らしていくことができるのだろうか…と妄想をふくらませています。

隣接地購入「狭き門」をくぐって

福田　道子



「隣の土地は借金してでも買え」というそうだ。教会の子ども達がよく遊び泳いでいた市の子ども用プールがこわされ、更地にされた時、先ず、この言葉が浮かんだ。でも、三百坪二千万円は今の教会にとっては問題外、教会員のほとんどが同意見でこの話はあきらめた。それが今年になって三分割して約百坪七百万円ほどではとの話になり、意見が分かれた。私は反対、教会には既に手入れできず草茫茫の広い庭があり、駐車場も牧師館新築もできる。全国募金でやっと何とかギリギリセーフの教会会計を思うと欲張りすぎであ

る。ただこれからの教会を支えてゆくべき若い方々が夢の実現の為にこの土地を買いたい、と強く望んだ。地域の誰もが自由につどい、ゆったりと過ごし、神様の恵みと生きている喜びを実感できる場にしたい、その為に精一杯がんばる、と言った。当然反対と思っていた最年長の方も、これからの教会には広い駐車場が必要、絶対買うべきとのこと。賛成がわずかに多く購入が決まった。教会員の予約献金は目標を上回り、夢に向かってみなの気持ちがひとつになり、力強く歩み始めたのを感じた。ただ協力献金を献げて下さっている全国の方々が何と思われるか。そんな力があるならもう献金しない、と言われてしまいそうで心配である。結局入札参加者が他になく市の最低希望価格で落札、地区の協力も得て借入金の目度もつき、期限内に支払いを済ませる手筈も調った。これらのことには神様の祝福と大きなお支えが感じられる。問題は百万円の借入金の返済を来年中に済ませねばならないこと。その上で、くぐってしまった狭き門のさきに続く険しい細い道を、ひとりも欠けることなく夢に向かってのぼりつめて行きたい。ただひたすら神様の祝福と大きな恵みを祈り求めるばかりである。

ひだまりガーデン



・・・来年はここにウッドデッキが！

「地域食堂…」つぶやく私

大西 由香里

今年、百歳以上の高齢者の居場所がわからない、といった事例が全国のあちこちであることが新聞やテレビで報道されていた。地域のつながりの希薄さや人の命が粗末に扱われている現実に背筋が寒くなった。

話題は全く違うが、少し前に石狩市の地域食堂『きずな』にスポットを当てた番組をみてから『地域食堂＝コミュニティレストラン』の取組に惹かれている。

「カレーライスが食べたい」と思って作っても一人だと何回も食べなきゃならないでしょ！

年を取った時にひとりぼっちの食事は寂しいから、みんなで食べたいと思ったのよ…」と創始者の女性は語っていた。食堂のシェフは、普通の主婦やＯＬが日替わりで担当し、家庭的な料理を安価で提供する。石狩産のお米、野菜、魚が調理され、メニューとなる。まさに『地産地消』である。人々が気軽に集い交流する席は合席、交流の中から地域で助け合う仕組づくりが生まれている。教会の愛餐もこのようにありたい…とちょっと感動した。それは、明子牧師が“人は何を食べるかも大事だが、誰と食べるかがもっと大事”と言っていたからだ。

ここ、島松はＪＲ千歳線沿線にあり札幌まで三十分。比較的若い人たちが多く住む街でもあるが、それでも高齢者は少しづつ増えている。仕事に疲れた人、子育てに孤軍奮闘するお母さん達等々、生きづらさを感じている人だって多いだろう。『島松野菜だより』の吉田農場の新鮮野菜を使って、教会で『食』を共にし、集う人々の貴重な居場所になる。夢みたいだが、そんなことを思って「島松で地域食堂…」とつぶやいている。

支えられる人は、支える人にだってなれる。活かし、活かされ、誰もが大切な一人なのだから。



枝運び



枝の仕分け

おわりに

かつて子ども達の声が響いた幼稚園園庭、故滝口孝牧師時代には皆で椎茸栽培に汗を流した。ここを単に車を止める場所でなく、人の心が通い合う日だまりとして残そう。そんな想いから隣接地購入に踏み切った。折しも「無縁社会」が広がっているという。個々の利益の最大化・効率化をよしとする社会で、人と人がつながる場や術（すべ）が失われてきているのだろうか？わが教会は経済的力のなさ故に、会堂も食堂も庭も古いまま残された。どうかここに主が新たな息を吹き込まれ、全ての人が集い「パンを分かち合う」ような奇跡が起きる場として用いられますように…。



木漏れ日が映える会堂。ありがとうございました。



証し

「平和の主　イエスと出会って」

神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。
ローマ書８章３１節

田川 千枝　談

恵泉女学園へ

私は釧路から上京し、恵泉女学園で（一九九二年から二年間）河井　道先生や日本バプテスト教会が建てた寮生活の中で信仰を育まれました。ちょうど釧路高等女学校を卒業した頃、いくつかの偶然が重なり上京が可能になりました。そこで私は初めてキリスト教に出会ったわけですが、時はまさに戦時下です。大きな弾圧はありませんでしたが、現役の軍人が学校に配属された軍事教練の授業は週一～二回はあったでしょうか。行進や防火訓練などがおこなわれました。寮の看板も外されていたと思います。

しかし、教会出席が可能だったのは幸いでした。受洗の決意をしましたが、父は何も言いませんでした。熱心な仏教徒（浄土真宗）だった祖母は「信仰は皆一つ所に至る」と信じていたようです。二年の勉学を終えて釧路に戻りましたが、戦局はますます激しく、町内会長をしていた父は、私の教会出席を強く反対しました。体制側の立場に立つべき者の娘が教会に出入りするなどもっての他でした。しかし、当時私が勤めていた銀行の近くに友人宅があり、畳屋である彼女の店舗の奥の住居で、まるで隠れキリシタンのように、二人で聖書を読み讃美歌を歌ったことが思い出深く蘇ります。彼女の母親は、本多庸一の姪に当たる人でした。

「皇民」として

思い返せば、私たちの世代は七、八歳に満州事変が始まり二十歳までずっと戦時下でした。国民というよりも、皇民教育をされた「皇民」でした。戦争は正しいものといささかも疑わずそれが骨の髄まで染込んでいました。小学校五・六年にはグループで千人針を集め、それを軍司令部に持参し新聞に載ることを誇りとしていました。受洗を決意したときも、キリスト教と天皇制との矛盾を考えるに至らず、何かを批判していくという力は持っていなかったと思います。

一九四四年、釧路教会の伊藤淳一牧師は出征し、教会は軍靴のままの兵隊が占拠し、銃剣が教会の前に立掛けられ、私たちは情けない思いをしながら見つめているだけでした。日独伊である日本は米英に間違なく勝利すると信じていました。本当に恐ろしいことです。この年のクリスマスは何もありませんでした。そして翌一九四五年七月十四日釧路空襲、そして敗戦、しばらくして牧師が帰って来られますが、進駐軍が教会にやってくるのです。そしてキリスト教ブームです。大勢の者が受洗しましたが、大勢の者が去っていきました。

島松伝道所へ

釧路教会から、小樽公園通教会、倶知安教会、小樽望洋台教会等を経て島松に通うようになりました。夫とふたり二時間近く車に乗って通いました。庭で椎茸栽培をしていた頃には、一日に二回も往復し、小樽の教会に売りに行った事もあります。募金で応援していただいた教会へも送りました。思っていた以上に作業が多く、皆礼拝が終わると作業着に着替えていました。苦労もありましたが、大変おいしいと評判でした。滝口孝牧師が三年目に亡くなられてからも、皆で力を合わせました。苦小牧地区の中でも、次々と会堂建築があり力を合わせました。ですから、いつも島松への月定献金以外に、毎月他教会への献金をすることができたのは大きな恵だと感じています。もちろん島松も全国や教区そして地区の方々からの応援があってのことで本当に感謝しています。

平和への思い

不思議な導きでキリスト教と出会い、八十四歳、今も生かされています。しかし今また戦争への準備が着々と進められているのを感じます。戦争中、生と死のはざまで生きていた思いも、何もなかったクリスマスも、敗戦の痛みも、今こそ思い返したいと思います。また、そうなるんでないかという危機感を強く持ちます。今すでに命を脅かされて生きている人たちを思い、そんな今だからこそ、戦争への責任の痛みを持ちながら真の平和の主イエスを心から求め宣べ伝えたいと思います。

（まとめ・辻中明子）

○写真前列中央が、田川千枝さんです。

「見えないものを信じる幸い」

イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」
ヨハネによる福音書２０章２９節

亀岡　徹

北海道も決して例外ではありません。年間一億の売り上げと、文庫絵本も好成績から感謝状も頂いた時代は過ぎ去り、すでに六千万の年間売り上げも危うい現状があります。いよいよ次年度は長年勤めていた職員の退職。財政面での具体的な問題も、残ったメンバーの中でどのように対応して行くのか。どれ一つとってもいい出来事がない。今まで全く経験したことのない大きな岐路に立たされている。

私自身数年前から取締役を任され、本当にこんな自分でいいのかと自問する日々の中、できるできないに関わらず慣れない事務的な実務だけが増えて行く。経理の知識や経営への能力があればもっと違う店の展開があったはずと、月末の支払いが迫るといつも思わされる。

月曜から木曜は外回り。月一で各方面への日帰り出張。営業と配達の傍ら牧師と話す機会も多く、ないしょの話しや教会と信徒に関わる苦しみや嘆きを聞くことが決して少なくない。時には一冊も売らずに数時間を過ごすが聞いて辛く、返す言葉もないまま無言の時間が過ぎて行く。牧師とは言え一人の人間。すべてパーフェクトな人間など存在しないが、こと教会は牧師にそパーフェクトさを要求したがる。おそらく今までの牧師と同じものを、新しい牧師が来ても求めるその体質は変わらない。ちょっとした行き違いから牧師と信徒の大きな溝ができてくる。はっきり言って牧師は孤独な存在であることが多い。「招聘」は、祈りと願いによる神の働きの中の出来事であるにもかかわらず、最終的には大きなしこりを残し教会を去って行く。そんな牧師をこの二十年で何人見てきただろうか。

また、新しい信徒が集わなくなり、活力がなくなった教会は、自分たちを大切に思うあまり、ますます殻に閉じこもり、「開かれた教会」は名ばかりとなる。様々な問題で教会員の顔はこわばり、日曜日午後だけ用事を足しに来る信徒もいる。外から見たら何やらぎくしゃくした教会の雰囲気だがいつも集う信徒は気づかない。

また、我々キリスト教出版販売協会においても、時代の流れについていくのは難しく電子書籍など新しいメディアを追うことも出来ず、キリスト教書籍が売れない。発行部数が減るので、さらに高価な書籍となり一部の方への専門文献になりつつある。もはやわずかな利益を得ながら細々と成り立っている全国の専門書店には荷が重過ぎるかもしれない。いや普通なら、とうに店を閉じる結果になったとしてもおかしくない状態である。

でも、そんな傾きながらであってもなんとか書店が存在しているのも事実である。それは、直接目に見えて店の売り上げの数字には示されないが、喜びと豊かさがいつもそこにはあるのは確かである。悩んだ牧者といる時も不思議に傍らにイエスが共にいてくれる。多くの方に覚えられ祈られている。沢山ある業者の中からわざわざ注文頂き支えて下さる。本当に感謝である。

目で見なければ、指を傷口に入れてみなければ、イエスの復活を信じなかったトマスの行動は、厳しい現実の中で結果を求められ、数字がすべてであるかのように思わされている私たちにも言える事である。

いつも神様は「大丈夫」と言って下さり、こんな頼りない、いつも愚痴ばかり言っている、祈ることさえ忘れている私たちを励まし愛して下さる。私たちは、その大きな恵に感謝しつつ、困ったことだらけの中だからイエスの言葉をひたすら信じ歩みたい。



キリスト教書を中心に扱う「北海道キリスト教書店」に勤めて今年で二十年を迎える。この仕事は、文書伝道というキリスト教伝道の一環として位置づけられ、出版・取次・書店三十二社が集まりキリスト教出版販売協会という組織で形成されている。

教会、幼稚園、関係学校への書籍や絵本を中心とした販売事業は、社会福祉関係から転職した自分にとって、教会生活の延長線にあり、そこから得る報酬は、まったくありがたく感じ新鮮な喜びがあった。しかし、社会の景気には影響されないとされていたこの業界にも激震が起こった。出版社ヨルダン社の倒産。それに伴う関係書店の閉店。全国第二位の売り上げを誇っていた東京聖文舎の破綻。昨年は、この業界の中で最も元気印の象徴であった西宮聖文舎の名物店長による交通事故とその後遺症。本当にこの数年の中で様々な出来事があった。

あの島チル、再び！「島松の信徒への手紙 二」

半年で部品交換しました

塩見　友樹

いまがもう十月なことに、正直なところかなり驚いています。名古屋に移り、もう七カ月になるのかと思うと、今年は本当に時間が過ぎるのが早いと感じています。

私は、現在は大学院の院生という、世間からすれば何とも時間に融通のきく立場なのですが、当の私も入学までは、「講義とかなくて自分のペースで研究だけしてればいいの？すごい時間がとれるんじゃね？」とか考えていました。ところがどっこい！入学してすぐに学会発表、実験、論文読み、また学会発表eｔc・・・息つく暇もないほどハードスケジュールで、あっという間に今に至ります。学会の前には二、三日徹夜で学校に泊まり込みなんてことも普通にありました。（実はこれを書いてる今も徹夜二日目です）こんな感じで当初の想像よりも、ずっと大変な毎日ですが、悪いことばかりではありません。苦労を重ねた研究成果を発表するときはすごく緊張もしますが、終えるとものすごい達成感があります。私はもともとあまり賑やかな性分ではないのですが、発表するときに限っては背筋をピッと伸ばし、声を出してしゃべるのがとても気持ちがいいです。そんな感じで楽しいのもつらいのも結構となり合わせだなぁ、なんてことを考えながらなんだかんだで充実した学校生活を送ってます。

話はガラッと変わるのですが、去年の島松だよりに弟の和樹が自転車について寄せていたのでちょっとネタをかぶせていこうかと思います。というのも私もかなり自転車に乗る方でこの間も映画を行こうとして適当に調べた映画館に向かった日があったのですが、片道2時間もかかってしまい映画を見に行くのか自転車こぐのかどっちかわからないような日がありました。そんな贅沢な時間の使い方をしながらも、名古屋でモソモソと生きてます。



島松での経験を通して

上島　響

今回、島松便りへの文章の依頼を受けて何を書こうか迷っていたところ、やはり島松で学んだこと、経験したことから何か書くことがいいのではないかと思い、私の島松での経験から今につながることを書いていきたいと思います。

私事ですが、今回のお話を受けて数日後私は無事に、東京都の教員採用試験に合格することができました。校種は小学校ですが、昔からの夢である教員という夢にまた一歩近づけたと思っています。私が教員になるという夢は決して島松教会時代から持っていたわけではありません。しかし、島松伝道所で多くの出会いの中で「人と関わる仕事」、「人の支えになれる仕事」に惹かれていくことはごく自然のことだったと思います。

島松伝道所では、小学校の5年生まで通わせていただきましたが、当時の思い出を思い出すと毎週同じ年代の友達と雪で遊んだり、教会の敷地内で焼き芋を作ったりと笑ったり、喜んだり、とても楽しい思い出しかありません。また、教会員の方にも優しくしていただいたり、いろんなお話を聞かせてもらったり、本当にすべてに愛情がこもっている時間だったなと思います。当時の私は、教会を神様と出会う場所、自分と向き合う場所というよりは、友だちや優しくしてくれる人と出会える最高の場所という認識しかしていなかったと思います。しかし、今改めて考えてみるとそうした考え、経験から私は人と関わる喜びを学べたし、人の支え合うことの大切さを学べたと思います。私は洗礼を受け教会に携わる一人としていますが、今でも私は教会を、人との出会いの場、自分との出会いの場、遊びの場、学びの場として本当に大切だと感じています。

最後に、子供のころ多くの経験をし成長できた場所が島松伝道所であるし、引っ越しをして再び教員への道に向けてくれたのは、神様であると強く感じています。私一人では何も成し遂げられませんでした。多くの経験や支えがあったからこそだと深く感謝しています。



さあ、サマーキャンプへ！
ひびちゃん、ダブルVサインでGO！
1997.7.20

ケータイとられた　レジ打ち　受験生



俺は　バイト　べんきょう
あそんでばっかり　いそがしい　いそがしい



ねえみんなー
これはこれで楽しいけど
トランプしようよー

野菜たべてんでー。



華の就活

わかものゴロク

しまチルの主張（つぶやき） 2010





肉
うまいっ！　あっ就職決まったよ。

キャッチャー　いやいや　受験生
中学生　就活



夏は北海道に
帰ってくればいいべさ

京都の夏は
暑いよ

京都に住むかも



もねが大人発言してる・・・
いよいよ高校

いよいよ中学
お話中すみません。これってどういう意味ですか。

ノリノリで～ペンキ塗り塗り～
なう～♪



俺にも塗らせて～なう～♪

ぼちぼち　いよいよ　今が
大学院　高校　楽しい時

企業実習はイタメシ屋。



花も就活

サックスソロいただきました。



サックス高校生

しままつ野菜だより

旬鮮便第八号

吉田さんの語録

ことしも、多くの方々に応援していただき新鮮野菜お送りすることができました。ありがとうございます。

この夏の猛暑は全国の農家にとっても、経験のないきびしさだったことでしょう。

我が吉田農場でも、種まきに時差をつけて、順番に収穫できるはずのとうもろこしの成長が、猛暑のため一度にやってきて、収穫や発送予定と大きくずれてしまいました。これからも、例年通りいかないことを覚悟しなければならないのでしょうか。自然の力の豊かさに感謝しつつ、自然の前に非力な人間であることも知らされました。みなさまからの声をご紹介いたします。

＊　北の大地を思う浮かべながら、色々料理していただきます。まず、今日は、パンとワインとアスパラ！

（京都Ｉさん）

＊　とうもろこし、日曜礼拝後買ってもらいました。美味しくて大きくて大満足でした。今後もこうしてお働きに加われれば幸いです。

（下松教会女性の会）

＊　送っていただいたじゃがいもは、とってもおいしいと評判です。主人はひとりでチンしてたべています。

（東京Ｓさん）

＊　地元の小・中学校が農場体験にやってきます。熱心に説明する吉田さんはいつも笑顔です。

「この子どもたちの中から、将来の農家が生まれると、夢見ているからね」

笑顔のわけは、そこにあったのか。私もそうなることを祈ります。

＊「日本の食料自給率って知ってる？わずか四十％ですよ。このままじゃ心配だ・・」

「これからの僕の仕事は、野菜を作りながら、このことを若者に伝えたいってこと」

おしらせ

ゆりねの販売を、今年で終えることになりました。ゆりねは、収穫まで５年間かかる手のかかる野菜です。残念ながら、土に菌が発生してしまい、安全な土にこだわる吉田農場としては、ゆりねの栽培を断念することになりました。他の野菜は、大丈夫これまで通りです。また、ご要望に応え、玉ねぎの発送を始めます。どうぞ、お申し込み下さい。

ご意見や、感想、発送状況等、いつでもおたずねください。（あ）



会堂建築献金をありがとうございました。

合計 149,000円　(2009.10.1～2010.9.30)

土地取得のための献金をありがとうございました。

合計 505,133円　(2009.10.1～2010.9.30)

We wish Your Merry Christmas
and
A Happy New Year !



編集後記

いつもお支えありがとうございます。古い木造の壁をきれいに塗りました。

カラーでお伝えできなくて少々残念ですか、是非一度見に来てください。

亀岡　徹

夏から秋のワークではひたすら枝の間伐を担当しました。枝と言いつつ一人では運べない程のものもあり、集めると小山のようで、改めて教会の歩んできた歳月を感じました。

大西真言

淡々とした歩みのようで、毎年必ず神さまは私たちに「どうするのか？」と、手に余るような宿題を与えて下さいます。建物、土地、この宿題を通して、教会の内側から湧き上がってきた夢を信じ、希望に導かれてこれらも歩みたいと願います。多くの方々の祈りが私たちを支えて下さっています。

辻中明子

新しく思い切った歩みを主に問いつつ、良きクリスマスを祈ります。

辻中徹也



日本キリスト教団 北海教区 島松伝道所

宣教活動推進募金のお願い

苫小牧地区　島松宣教協力委員会

～ 島松伝道所の歩みを覚えてお支えください ～

募金要領は下記をご参照ください

「島松伝道所」という可能性

札幌北光教会　後宮 敬爾

ＫＹということばが流行ったのは、２００７年だそうです。「流行語大賞」の候補になったりして、あちこちで「ＫＹだなあ」という会話が交わされていました。多くの人が「場の空気を読めない人」を揶揄することばとして使っていたのではないでしょうか。

でも、この「ＫＹ」が実は、恐ろしいことばだったと最近になって気づかされたのです。「空気を読めない」とあざけることは、「空気を読まないといけない」という意識が支配的だということです。つまり、自分の思いより全体の意識に合わせていくことが大事で、「それができないと生きていけない」という子どもたちの現実があったのです。それが極端なかたちで表面化するのがいじめです。

自分らしく生きたくても生きられない、そんな圧力を感じながら、子どもたちが生きています。そして子どもの姿は、大人社会の写しですから、私たちの生きている社会が「自分らしく生きられない」社会になってきていることだということなのです。

自分らしくない考え方と言動を強制されながら生きていると、誰でも疲れるでしょう。誰でもため息をつきたくなるでしょう。流れについて行くことに疲れ果て人の流れから、そっと離れてみたら・・・そこに島松伝道所が佇んでいます。

島松伝道所は「ひだまり」の共同体を志向しているそうです。人々が集まってきて、そして思い思いに自分の時間を過ごし、自分であることを回復していくような空間です。面白いことに、島松で自分を回復した人たちは、今度は、島松伝道所という建物を回復しようとするのです。島松伝道所の礼拝堂内装が見事に再生されたのが２００８年度、そして今年度は外装のペンキ塗りが施され島松伝道所自身も回復しつつあるのです。

島松伝道所の宣教は、従来の「教化改宗伝道」を手法とした教会の在り方とは違うかもしれません。力を持ち寄って、そして弱さも持ち寄って、人々の居場所を提供するような宣教です。疲れた人、重荷を負っている人、その人が集まる時に、その中心にイエスがいて下さるのだと信じる宣教です。愛して下さるイエスと出会った人が、自分自身を回復していくような教会形成です。

「障がい者と共にあること」「子どもたちと共にあること」「共にある教会形成」を目指しつつ様々な試行を重ねながら島松伝道所は歩んできました。そして、多くの人の祈りと協力に支えられその歩みが「ひだまりの教会」として現れてきたように見えます。

今年も島松伝道所を覚えて下さり、お支え下さいますようにお願いいたします。この教会の宣教には、既成教会にはない可能性があります。この可能性を祈り、支えていただきたいと願います。

募金要領

- 募金目標額：3,700,000円
- 募金期間：第五期 5年間（2007年～2011年）
- 献金方法：月毎・年毎・随時
- 郵便振替口座送金先：
  02750-1-19793
  日本基督教団島松伝道所

募金に賛同してくださる方々（敬称略・順不同）

久世 そらち【北海教区議長】，笠田 弘樹【同副議長】，
卜部 康之【同書記】，日向 恭司【同幹事】，
石垣 雅子【弘前学院聖愛高校宗教主任】，
糸井 国雄【隠退教師】，入江 清弘【隠退教師】，
岩井 健作【隠退教師】，宇野 稔【倉敷水島教会】，
榎本 栄次【無任所教師】，榎本 恵【アシュラムセンター】
大門 義和【島之内教会】，鬼形 恵子【横浜英和女学院】，
岸本 和世【隠退教師】，黒多 健【向島伝道所】，
小西 望【仙台北教会】，塩見 耕一【北星余市高校宗教主任】
滝口 宣【単立 日本キリスト教 所沢教会】，
武井 義定【松山古町教会】，中谷 哲造【隠退教師】，
中村 博【隠退教師】，西尾 市郎【うるま伝道所】，
野本 真也【同志社大学理事長】，平方 美代子【隠退教師】
平田 義【愛隣館ディケアセンター所長】，
府上 征三【コドモのイエ幼稚園】，藤田 公【隠退教師】，
宮島 利光【隠退教師】，森脇 忠雄【隠退教師】，
山本 真司【同志社国際高校宗教主任・錦林教会】